HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	博物館を支える人たち
Author(s)	持田, 誠
Description	総合博物館へ行こう. 第6回.
Citation	きぼうの虹, 328, 7-7
Issue Date	2010-05-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43027
Type	article
File Information	kibou328.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

総合博物館へ行こう

第6回

博物館を支える人たち

総合博物館
資料部研究員　持田　誠

写真1　展示をつくるには、職員以外にもたくさんの人たちの協力が必要。

標本は三百万点、職員は八人

連載第一回で、当館の標本は約三百万点であることを紹介した。では、三百万点の標本を抱える職員はどれだけいるのだろうか？

総合博物館には学芸員がいない。その代わり、教授とか准教授とか、学部と同じような教員がいる。彼らが、学芸員が本来するような博物館の企画・運営を担っている専任職員である。その数、実に八人。そのうち一人は函館にある分館、水産科学館に常駐しているので、札幌本館が常に抱えている専任は七人ということになる。これを多いと捉えるか、少ないと捉えるかは考え方しだいだが、抱えている標本は約三百万点で、分野も多岐に渡っている。だいたい、この八人は博物館員といっても大学の先生だ。研究もすれば学生の指導もする。海外にも行けば社会的ないろいろな会議にも参加する。到底、全ての博物館活動を、この八人で実行することはできない。

写真2　1階の博物館受付。案内や解説など、博物館の総合窓口の役割を果たしている。

見えるところ　見えないところで

一方、総合博物館へ来館した人たちが最も接する機会が多いのは、八人の教員よりも一階の受付の人たちであろう。しかし彼女達は博物館の職員ではない。博物館、すなわち大学からそれぞれの業務を請け負っている、民間会社で働く人たちだ。

けれども、彼女達は職員以上に、来館者のことをもっとも良く知っている。それは、日々、来館者と直接接し、対話したり苦情を聞いたり、さまざまな対応をしている、博物館の窓口、看板だからである。展示室の第一線で来館者と向き合って知ることは、博物館を改善していく一番基本になる情報のはずである。これは、中にこもって研究しているだけでは絶対にわからないものである。

毎朝六時三十分、総合博物館では掃除が行われている。清掃業務を請け負う業者の人たちが、黙々と館内のゴミを集めたり、床を磨いたりする。博物館にとって、日々館内をきれいに保つことは、単に見た目を美しくするだけでなく、資料の保存環境を維持する上でも重要である。

写真3　正面玄関の守衛室は博物館ではないが、実際には来館者と接する機会が多い。

一方、深夜の博物館を巡回しているのは、警備会社に所属する守衛さんだ。交代で泊まり込み、日中は正面玄関で案内をしたり荷物や郵便の対応をし、閉館後は定期的な巡回点検を行う。監視カメラや火災報知器の動向にも気を配る。清掃も警備も、私たちの日頃気づかないところで博物館を支えている、縁の下の力持ちだ。

朝の開館と共にシャッターを開けるミュージアム・ショップは、株式会社エルム・プロジェクトという、北大生協の関連会社が運営を任されている。お店そのものは大学のものだが、実際の運営を任されているのがこの会社で、さらに店頭に立つのは現役の北大生アルバイトである。北大の博物館を北大生が切り盛りしている。商品を売るだけでなく、北大に関するさまざまなことにも答えられる、頼もしい存在だ。

写真4　ミュージアムショップの店員は北大生のアルバイトが担っている。

裏方が築く館の歴史

この他にも、レファレンスや展示作成などの学芸業務を担う非正規雇用職員や、理学・生命事務部の博物館担当が常駐する事務職員、館の内外で博物館を支援する資料部研究員など、身分も肩書きも異なる多くの人たちが総合博物館を支えている。

こうした人たちは、公式の記録には残らない、博物館の完全な裏方である。しかし、開館十周年を経た総合博物館の歴史は彼らの歴史であり、これからの歴史を築いていく担い手も、やはり彼らである。博物館を支える人たちもまた、多数の標本と同じく、博物館の宝である。